# みなさんに助けていただきました

広島大学高等教育研究開発センター長・特任教授（兼）
副学長・大学院人間社会科学研究科長
小　林　信　一

私は，2018年7月に高等教育研究開発センター（RIHE）に特任教授として着任し，同年10月からセンター長を拝命いたしました。通常であれば，2022年3月には定年退職になりますが，特任教授は一般の教授とは異なり，制約もたくさんありますが，定年は明確には決まっていません。幸か不幸か，あと１年は，現在の職務を継続することになっています。短期間の特任教授であり，退職時期もまだ正式には決まっていない私のために，このような定年退職記念の頁を割いていただくことは申し訳ない気持ちでいっぱいです。

もともと，RIHE の前身である大学教育研究センターとは学生時代から縁がありました。毎年のように RIHE を訪問していましたし，多くの先生方に声をかけていただいたことも忘れられません。何度か，研究員集会その他の会合に呼んでもらったこともありますし，講義をしたこともあります。約40年のお付き合いがありましたが，研究者人生の晩節に RIHE の一員に加えていただくことになったのはまったく予想外のことでした。

私が，日本で最も長い歴史を有する RIHE のセンター長に相応しいか否かは，さまざまなご意見があると思います。自分でも，歴代のセンター長のように，日本の高等教育研究を代表する研究者であるという自覚はまったくありません。私の RIHE での役割は，次のリーダたちに，できるだけよいタイミングと形でバトンを渡すことです。あくまでも中間走者ですが，バトンを落とすことなく渡す責任は自覚しています。

まだ，バトンを渡すタイミングには至っていませんが，それも，自分だけの力でできるわけではなく，OB・OG，コリーグのみなさん，センターの教職員，本部をはじめとする学内の教職員のみなさんの支えがあって初めて実現できることです。少なくとも現時点まで，多くのみなさんに助けていただいたことは明らかで，感謝の念に堪えません。

短期間の奉職でしたが，悲しい知らせにも，嬉しい知らせにも遭遇しました。2019年10月には，第7代センター長の關正夫先生が逝去されました。2021年11月には，第8代および10代センター長の有本章先生が秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章されました。お二人とも，私が若かった頃にお世話になり，励ましていただきました。私から見ると，まさに巨人です。悲しみも喜びもひとしおです。

本稿のような原稿では，通常は，自分の研究生活などを振り返り，どのような業績を残してきたかを紹介するのでしょうが，私は，平均すると4年に1回くらいのペースで転職を繰り返し，研究分野も高等教育のみならず，科学技術政策，科学技術社会論，科学技術史，工学教育，障害者研究，それらの関連分野やその他の分野にわたり，まったく統一感がなく，messy としか表現しようがありません。このことは，研究業績のリストを見ていただければお分かりでしょう。なお，研究業績

には抜けもありますし，省略した口頭発表，講演録，報告書，新聞や雑誌による紹介やコメント掲載などを含めると，さらに乱雑になり，一人の人間の活動として理解することはほとんど不可能でしょう。私は，研究者としてのスタートの頃に「専門外のことには口を出すな」と忠告されたことがありました。現実は，その逆を進んだために，研究者としては大成せずに終えようとしています。今の若い研究者から見れば，不器用で不効率な研究生活だと打ち捨てられそうです。

このような悲惨なことになったのには，振り返ってみれば，本質的な理由がありました。そもそも40数年前には，高等教育研究も科学技術に関する諸研究も，まったく認知されていませんでした。むしろ「余計なことをするな。そんなことに税金を使うくらいなら，我々の研究に回せ」などと何度も批判されました。ですから，当初は高等教育研究，科学技術政策研究などと口にすることすら憚られました。我々が指導を受けた先達の世代は，他の分野で活躍されている方が新分野に参入されていたのですが，我々の前後の世代は，大学院生時代から，直接新分野に参入するという無謀な選択をしたわけです。思い返せば，世界的に interdisciplinary が話題になったのは1970年代前半です。

1990年代に入ると次第に状況が変わりました。これは日本だけではなかったのですが，こうした分野が市民権を得るようになり，学会も設立されるようになりました。それ以前は，RIHE を除けば活動の場は限られており，さまざまな分野に出かけて行かざるを得なかったのです。その結果，自分の専門は何かわからないような年月を過ごしてきたわけです。

いい加減な研究生活でしたが，メリットもありました。特定の分野で研究を開始していたら会えないようなトップの研究者たちが序列を無視して，面白がって会ってくれるのです。それも非常に多くの分野のトップレベルの研究者と会いました。また，そうした研究者は懐が深いのか寛容なのか，何かにつけて「手伝って」と声をかけてくれました。その結果，30代後半から40代前半までには，とても幅広い分野の，民間も含むトップ研究者とお付き合いをすることができました。このことは，その後の私の活動の展開には大きな力となりました。なんのことはありません。私の研究生活は多くの皆さんに助けていただいた結果なのです。

2013年には大学を辞めて，国立国会図書館の専門調査員に転職しました。国会図書館は立法府に設置されているために，さまざまな制限があり，組織外の活動にはほとんど参加できませんでした。行政府との私的交流も原則としては禁止されます。しかし，国会図書館の活動に際しては，それまでの人脈をフルに活用させていただきました。

私的なことですが，私は国会図書館に関わるようになる少し前，2009年2月に大動脈解離になりました。この時は，よい条件に恵まれて，発症から30分程度の短時間で治療に入ることができ，また主治医の懸命な治療で，大事には至りませんでしたが，２ヶ月以上仕事を休むことになりました。このときには，多くの方に迷惑をかけましたが，穴を埋めていただき，乗り切ることができました。１年間は仕事をセーブしましたが，そろそろ復帰しようかと考えていたタイミンクで誘っていただいたのが，国会図書館の新規プロジェクトでした。私の復帰の機会をタイミングよく，提供していただいた形です。最初３年間は客員として関わり，４年目からは専門調査員として貴重な経験をさせていただきました。

実は，国会図書館の最後の1年間は，筋力の低下に悩まされました。後で判明したのですが，封入体筋炎という難病が原因でした。急速に筋力が低下し，国会図書館の退職後は筋肉の炎症を止めるために，長期間の入退院を繰り返し，最後には車椅子生活になりました。封入体筋炎は基本的にはゆっくりと筋肉がなくなる病気で，根本的な治療法はありませんが，それでも病院の先生方や地域の医療機関が連携して支えてくださり，今は病気の進行は緩やかになっています。車椅子生活への移行は，たまたま以前からおつきあいのあった障害関係の研究者・技術者や製造現場などの皆さんの励ましと後押しで前向きに進めることができました。

無職のまま入退院を繰り返しながら治療を続けていた私でしたが，国会図書館を退職したというので，新聞，雑誌，TV 局などが訪ねてくるようになりました。入院中に原稿を書いたり，病院で面会したこともあります。大学や役所も何かと依頼をしてくるようになりました。そのおかげで，寝たきり生活になるきっかけを失いました。極め付けが RIHE で，常勤で来てくれという無謀とも言えるお誘いでした。しかし，こうした多くの皆さんのおかげで，今日の私があります。しかし，健常者の生活を真似ていますが，健常者ではないので，いろいろとご迷惑をかけたり，たくさんの皆さんに日々の生活の何気ない局面で助けていただいています。

このように振り返ってみると，私の研究者としての活動も生活も，多くの皆さんに助けていただき，今の私があることは明白です。感謝の気持ちはもちろんありますが，たくさんの支えに応えることができているのか，自問を続けています。もちろん，RIHE や広島大学のために少しでも力を注ぎたいと思います。それだけでなく，とくに次の時代を担う若い人たちの応援をしたい，それが私に残された時間の使命です。

最後に特集に原稿を寄せていただいた4名の方について簡単に触れておきます。塚原修一さんは山田圭一門下の先輩で，学生時代から常に私の手本で，背中を追いかけ続けてきました。小林傳司さんは，いわば同志代表です。陰に陽に連絡を取り合い，助け合った仲です。齋藤芳子さんは，私の下で活動を支えてくれた後輩代表です。私は転職を繰り返したので，いわゆる弟子はほとんどいませんが，多くの若手が縁あって集まってくれました。私は優れたリーダではなかったので，いろいろと迷惑をかけましたが，今でも多くの後輩が助けてくれます。寺倉憲一さんは現在，国立国会図書館の調査及び立法考査局長ですが，私と国会図書館を結びつけてくれた人々の代表です。立法府での仕事という貴重な経験のきっかけをいただきました。4名の皆さんだけでなく，名前は列挙しませんが，非常に多くの皆さんに支えられてきました。

これまで助けていただいた多くの皆さんに感謝して。

2021年大晦日